

## Race Relations in Little Tokyo during the Postwar Period: The Resettlement of Japanese Americans and the Activities of “Pilgrim House”

(再定住期リトル・トーキョーにおける人種関係：  
「ピルグリム・ハウス」の活動を中心に)

Naoko Masuda\*

**SUMMARY:** On 2 January 1945, the Japanese Americans who were uprooted and interned were allowed to return to the West Coast. They left the internment camps that had been Japanese American communities for a multiracial society.

Little Tokyo in Los Angeles had not only been a Japanese American enclave but had been a residential area for low income groups since the prewar period as well. It had also been a multiethnic and multi-racial neighborhood. During World War II, African Americans moved from the South into Little Tokyo after Japanese Americans were forced into internment camps and they transformed Little Tokyo into “Bronzeville.” In response to the sudden increase of African American residents, “Pilgrim House” was organized in September 1943 in order to help them. “Pilgrim House” tried to create a favorable atmosphere for returning Japanese Americans and to prevent the returnees and African Americans from clashing.

The purpose of this study is to discuss—through an analysis of the activities of “Pilgrim House”—how Japanese Americans built relationships with their African American neighbors and how their view of their neighbors influenced their relationships.

---

\* 増田 直子 Lecturer, Japan Women’s University, Tokyo, Japan.

## はじめに

第二次世界大戦中に西海岸に住んでいた日系アメリカ人は強制立ち退きを強いられたが、1945年1月2日より帰還が許可された。いわゆる再定住の始まりである。<sup>1</sup>

従来の日系人の西海岸への再定住研究は、日系人に対する排斥あるいは受け入れを表明した白人たちに焦点を当てた研究<sup>2</sup>がほとんどであり、帰還した日系人がいかにアメリカ社会 多くの場合、立ち退き前に居住していたコミュニティ と関わるようになったかの研究は十分であるとは言いがたい。日系人の再定住を管理していた「戦時転住局」(War Relocation Authority, 以下WRA)のスタッフが1945年から47年までの再定住の状況をまとめた報告書やキャリアン・ヨコタの論文は、数少ない例外である。WRAの報告書は収容所を出た日系人たちがいかに白人社会に受け入れられたかが中心であり、ヨコタの論文は日系人は他のマイノリティと同じく差別された歴史を持っているにもかかわらず、多元種社会に対する意識をあまり持っていなかったとしている。<sup>3</sup>しかし、これらの研究は、他の人種との関係において日系人たちが「自己」と「他者」をどう位置付けようとしたのかの視点が見られない。

多くの人種関係の研究においては、白人と黒人、白人と日系人というように支配的な白人と従属的な非白人との二項対立として捉えられてきたが、西海岸、特にロサンゼルスのような都市においては、日系の他に、フィリピン系、メキシコ系などのグループが存在し、単純な図式では捉えきれない。それぞれのグループの社会的地位は白人との関係だけでなく、他のグループとの相互作用によるところも大きかった。特に住宅差別のため、白人居住区に住むことが困難であった日系人たちは、戦前から他の人種的マイノリティたちと隣り合って住んでいた。リトル・トーキョーやその東部にあったボイル・ハイツ、ウェストサイド(36番街)はその典型例である。こうした地域の住人たちも戦後になって、日系人を含め、異なる文化を相互理解するための組織やプログラムを作った。<sup>4</sup>戦時中に人種関係の悪化を経験したロサンゼルスでは人種的マイノリティに対し、関心が高まっていた。日系人の西海岸への帰還が始まった直後の1945年1月には、ボランティア組織「アメリカの原則とフェアプレイに関する太平洋委員会」の主導で、日系人の社会への統合や人種関係に関する組織活動作りについて話し合いが持たれた。より良い人種関係の構築や、市民的自由の保護に努めようとしたのである。<sup>5</sup>帰還者たちも受け入れる側も新しい関係を模索していたと言えよう。いいかえれば、日

系人たちは白人との関係だけを考えていれば事足りるという状況ではなかったのである。異なる人種との関係を通して、日系人たちの自己認識と他者認識が形成されていったことを理解しなければならない所以である。

本稿は、以上の点をふまえ、1945年から1950年にかけてのロサンゼルス、リトル・トーキョーへの日系人再定住の過程を考察しようとするものである。ロサンゼルスには戦前から日系人と他の人種が隣り合って暮らしていた地域がいくつか存在していたが、リトル・トーキョーは日系人たちにとって単なる居住地であるだけでなく、経済や文化の中心地でもあり、象徴的意味合いを持っていた。そこで同地域で活動した「ピルグリム・ハウス」を中心に検討する。同組織は、日系人の立ち退き後に同地域に生じたさまざまな問題（人口過密、住宅不足、低い衛生レベル、青少年の非行、及びこれらに伴う人種関係の悪化）に対処するために、1943年9月に設立されたものである。これらの問題は黒人人口の急増に付随して起こったことだった。したがって「ピルグリム・ハウス」は、当時帰還した日系人を支援した組織や、人種協調を模索した多人種のための組織の一つであると同時に、南部から流入した黒人と帰還した日系人の住むリトル・トーキョーという特殊な地域のための組織でもあった。

「ピルグリム・ハウス」関連の史料、ロサンゼルスで発行された日系新聞および黒人新聞『ロサンゼルス・トリビューン』<sup>6</sup>、カリフォルニア大学バークレー校バンクロフト図書館所蔵の日系人の再定住関連の史料を用いながら、まずリトル・トーキョーが日系人居住区から黒人居住区となった過程を述べ、そしてどのような目的で「ピルグリム・ハウス」が設立され、活動をしたのかを見ていく。さらに、「ピルグリム・ハウス」の活動が日系人と黒人との関係においてどのように機能したのかを検討する。次いでこの組織を通しての他の人種との接触から、日系人はどのような人種意識を持ったのかを明らかにし、最終的には日系人たちにとって再定住期におけるアメリカ社会への統合がどのようなものであったのかを考察する。

## ・ リトル・トーキョーの歴史的背景

20世紀初頭、当時日本人移民が最も多かったサンフランシスコで排日の気運が高まり、彼らは石油発掘などで好景気に湧いていたロサンゼルスに仕事を求めて流入するようになった。1910年代頃からロサンゼルス

は北米の中で最も日本人移民が多い街となった。しかし、ロサンゼルスでも、日系人に対する差別は存在し、部屋を貸さないといった住宅差別や、ある地域の不動産を所有者間で特定の人種・民族集団には売却しないとする不作為約款 (restrictive covenant) のため、日系人たちは限られた地域に集中することとなった。チャイナタウンの南、ダウントウンの東一番街 (East First Street) とサン・ペドロ街 (San Pedro Street) の辺りが「リトル・トーキョー」と呼ばれるようになった。リトル・トーキョーは日系人たちの経済的、社会的、文化的、宗教的中心地としての機能を持つようになる。ロサンゼルスの日系人の人口が増えるとともに、彼らの居住区も拡がり、南は十番街まで、東はボイル・ハイツの近くまで拡大し、1930年には彼らの多くは、リトル・トーキョーの半径3マイル以内に住んでいた。<sup>7</sup>

リトル・トーキョーには、日系人経営の下宿屋、レストラン、日本食材を扱った店、銭湯、床屋、劇場などがあつた。人種差別や英語力不足のため、白人社会で仕事を得られなかった日系人たちは、リトル・トーキョーで職を得た。近郊農業に従事していた日系人たちも、休日には同地域で「日本文化」を堪能した。二世たちにとっても、同地域は余暇を家族や仲間と過ごす「文化の中心地」であつた。このようにリトル・トーキョーは、差別され、社会から隔離されていた日系人たちにとって、コミュニティの中心としての役割を果たしていた。<sup>8</sup>

しかし、戦前からリトル・トーキョーは、日系人だけの居住区ではなかつた。同地域は、ロサンゼルスの中でも最も貧しい地域の一つであり、低収入の白人、フィリピン系、メキシコ系、黒人なども住んでいた。リトル・トーキョーは日系コミュニティの中心であると同時に、貧困層の居住地でもあつたため、日系人たちは日常的に他の人種と隣り合って暮らしていた。マジョリティは白人であり (82%)、非白人居住者 (18%) の大半は日系人であつた。日系人を含む非白人マイノリティの住人たちの多くは、白人たちから家や店舗を借りていた。白人家主たちの間では、日系人は「部屋をきれいに使う」と評判が良く、他の非白人よりも日系人に貸したがつた。日系人たち、特に一世は白人を自分たちの顧客と見なし、メキシコ系やフィリピン系など非白人を使用人と見なす傾向にあつた。日系人たちは、他の人種と職や居住地を争う中で、自分たちを社会の支配層である白人の側に置こうとしたのである。彼らは他の非白人との差異を強調することで、白人と同等に扱われるべき存在であると示そうとした。<sup>9</sup>

1941年12月7日の真珠湾攻撃により日本とアメリカとの間に戦争が始

まると、日系人たちはそれまで以上に敵意や猜疑の目で見られるようになった。1942年2月19日にフランクリン・ローズヴェルト大統領は行政命令第9066号に署名し、西海岸からの日系人の強制立ち退きが始まった。リトル・トーキョーもその例外ではなかった。立ち退き後、建物は荒れ、街はゴースタウンと化した。

しかし、1943年半ばになると南部から仕事を求めてロサンゼルスに黒人たちが流入するようになった。白人男性が戦争に行き、労働力が不足していたのである。こうした状況が有利に働き、雇用差別を乗り越えて黒人たちは軍需産業や製造業に従事した。しかし、彼らはロサンゼルスのおよそ半分の地域で住宅差別にあい、戦前からあったわずかな黒人居住区に住みついた。そうした居住区の一つだったセントラル街のすぐ北にあったリトル・トーキョーに、日系人の立ち退きによって空きができる、黒人たちが住みついたのである。

立ち退きの際に建物の賃借権を失った一世たちに代わって、黒人たちが白人から賃借権を得た。彼らはアパートを所有し、商売を始めた。プール・バーやナイトクラブもでき、ブルースが演奏された。リトル・トーキョーは経済的にも文化的にも「ブロンズヴィル」と呼ばれる黒人の街となった。しかし、彼らが一時しのぎの場として住みついたことや、彼らの社会的、経済的地位の低さ等から、「ブロンズヴィル」は結束力を欠いた、不安定なコミュニティであった。<sup>10</sup>

急激な黒人人口の流入で過密地域となったリトル・トーキョーは、劣悪な居住環境となっていた。1943年には、毎月平均5500人の黒人がロサンゼルスにやって来ており、1943年の5月と6月の2か月間だけで約15000人の黒人がこの地域に流入したと報告されている。住宅不足のため、衛生面で問題があり、持ち主がはっきりしない住宅を彼らは不法占拠した。また、こうした場所が犯罪などの温床にもなり得た。このような状況に対して、市当局は迅速に有効な手段を講じることができず、リトル・トーキョーは「頭痛の種」となっていたのである。<sup>11</sup>

1945年1月2日から日系人の西海岸帰還が始まった。最初の半年間にロサンゼルスに戻った日系人は1107人にすぎなかったが、1945年末には15115人になっていた。<sup>12</sup>戦前の自分たちの街に戻ろうとした日系人と戦時中やってきた黒人との間に目立った衝突はなかったとされているが、両者は緊張関係にあった。日系人たちの帰還が許可されると、黒人たちの間では日系人たちが黒人をリトル・トーキョーから追い出すつもりだという噂が広がった。両者の間で職や住居をめぐる対立が起こることが予想され、次のような指摘がなされた。

ジャップは、長い間ロサンゼルスで黒人の仕事であった奉公人の職を侵している。ジャップの下働きを雇うことが流行りとなっている。家事雑用の仕事をしている黒人とジャップの間ではお互いに憎しみが蓄積された。<sup>13</sup>

黒人たちの間には、帰還してくる日系人だけが市当局やWRAなどの連邦政府の機関などから援助を受けているという思いもあった。前述の記事でも示されているように、白人たちが黒人よりも日系人に対して好意的であると黒人たちは考えていた。ビジネスにおいては、黒人の店の顧客は黒人だけであったが、日系人の店は戦前のように日系人の顧客だけに頼ることはせず、黒人や白人も相手にした。次第に黒人たちはリトル・トーキョーから出て行き、黒人の店は閉鎖された。この結果、黒人たちは日系人だけが優遇され、自分たちは排除されていると感じた。一方、日系人たちは黒人たちが彼らの帰還を望んでいないと考えていた。日系人の教会や寺院の建物は黒人たちの教会として使用されており、建物の返還を巡りトラブルが生じていた。<sup>14</sup>

## ・「ピルグリム・ハウス」の活動

戦前からロサンゼルスに住んでいた黒人たちの間には、南部からやってきた黒人に対して、教育、文化、社会的地位や歴史的背景の違いなどから同じ仲間として迎え入れるより、むしろ嫌悪する者がいた。新来者に対して、手を差し伸べる者は少なかった。<sup>15</sup>「ピルグリム・ハウス」は、リトル・トーキョーに流入した、知り合いもなく、助けてくれる人もいない黒人の急増に伴って起こった問題に対処するため1943年9月に「福祉評議会リトル・トーキョー委員会」(Little Tokyo Committee of the Welfare Council)によって組織された。資金援助を行ったのはキリスト教の会衆派教会と長老派教会であり、「ピルグリム・ハウス」の本部は、日系人の立ち退きによって無人となり、この二つの宗派が共同で管理していた日系ユニオン教会の建物の中に置かれた。シカゴから来た黒人牧師ハロルド・キングスレーが同組織の代表を務め、参加者の多くはリトル・トーキョー近辺に住む黒人及び会衆派と長老派の関係者であった。同組織は、当時この地域が抱えていた犯罪等の問題解決のため、ボーイ・スカウトやカブ・スカウト、玩具や本の貸し出し、体操のクラスなど青少年向け

のプログラムを提供したり、地域改善のための資金集めをしたりしてコミュニティ・センター的役割を担おうとした。同組織は地域に根ざした組織として、南部からの移住者からなる居住区に安定と連帯感をもたらそうとした。<sup>16</sup>

日系人の帰還が始まると、「ピルグリム・ハウス」はコミュニティ安定のため、短期的目標として日系人たちに円滑な人種関係のための活動の存在を知らせることを掲げた。同組織は、リトル・トーキョーの住人たちに図書館、体育館、保育園の施設などを提供した。長期的目標としては、「ピルグリム・ハウス」のある地域の様々な人種の住人たちの良好な関係を維持し、促進することであった。キングスレーは日系人のサミュエル・イシカワを同組織の臨時スタッフとして雇った。イシカワは、リトル・トーキョーに戻ってきた日系人事業家たちやYWCAやYMCAの日系人代表者、フレンド派経営や仏教会経営のホステルの関係者、黒人新聞『ロサンゼルス・トリビューン』で働く二世で後に作家として名を馳せることとなるヒサエ・ヤマモトなどと連絡を取り、日系人に関する会合を度々開き、帰還した日系人の子供たちを「ピルグリム・ハウス」のプログラムに組み込む方法や、よりよい人種関係のための教育方法を話し合った。イシカワは、「当初、日系と黒人の子供たちと一緒にさせることを少し心配したが、驚いたことに子供たちはお互いに何の偏見も持っておらず、一緒に遊んだ」と報告している。<sup>17</sup>

「ピルグリム・ハウス」や他の市民権組織や宗教組織の働きかけの結果、日系人が帰還した際に懸念された人種対立は起こらなかった。リトル・トーキョーはギャングやばくち打ちが集まる場所となっており、喧嘩も頻繁にあったが、黒人と日系人との間では目立った衝突はなかった。黒人の中には日系人の再定住を助けなければならないという呼びかけをする者もいた。戦時中には黒人居住区となったが、リトル・トーキョーは黒人たちだけの街ではないという意識が黒人たちにはあったのである。<sup>18</sup> WRAは日系人の黒人居住区への帰還を「異人種間の適応における奇跡」と呼び、「日系市民協会」(Japanese American Citizens League, 以下 JACL)のロサンゼルス支部代表のスコッティ・ツチャは「私たちの多くは恐る恐るここにもどってきた。なぜなら、黒人が私たちの家や店にいることを知っていたからだ。しかし、黒人はとても好意的であるとわかった。彼らは私たちに敬意を払い、同情している」と述べた。<sup>19</sup>

日系人の帰還後、「ピルグリム・ハウス」は組織内に多様な人種のための教会である「すべての人びとの教会」(The Church of All Peoples)を作った。この活動への参加者はそれほど多いものではなかったが、黒人、日

系人、白人それぞれの比率は同じくらいの割合であった。「ピルグリム・ハウス」は、もともとは日系人のための教会であった建物を使用していたが、周辺地域に住む日系人だけでなく、黒人、白人、メキシコ系、中国系のための教会としての役割を果たそうとした。英語ができない一世たちのために日本語礼拝も行われた。また、教会の青少年を対象にした「人種関係ワークショップ」を開き、「差別の影響を直接見るため」にロサンゼルス市内の人種隔離地域を回るツアーを行った。このように「ピルグリム・ハウス」は人種間の交流を通して、相互理解を促すことで、リトル・トーキョー内の共存を図ろうとした。<sup>20</sup>

## ・ 日系人と黒人との摩擦

### (1) リトル・トーキョーの強盗事件

日系人の帰還当初リトル・トーキョーでは黒人との間に大きなトラブルがなかったが、1947年1月から2月にかけて黒人の日系人に対する強盗事件が連続した。「黒い強盗の出没頻々 一夜に日系人間で被害二件」「伊藤政十氏も黒に襲る」「三人の二世女性財布強盗を阻止」などの見出しが連日のように紙面を飾った。どの事件もリトル・トーキョーおよびその近辺の路上で夜間に日系人が黒人に襲われ、金品を盗られるというものであった。<sup>21</sup> 日系人を狙った犯罪の増加を深刻に受け止め、日系人事業家たちは警察関係者を交えて対策を話し合うためにたびたび緊急会合を開いた。その結果、リトル・トーキョーにあるホテルに事務所をおき、警察本部と密接な連絡を取ることと、夜警として強健な二世の退役軍人を二名雇うことを決めた。<sup>22</sup>

日系人たちが取った自衛手段は黒人たちを刺激し、両者間の緊張を高めた。日系人たちが夜警を雇ったことで、日系人たちが黒人全体を犯罪者と見なしており、黒人たちを追い出そうとしているという噂が広まった。日系人たちの取った措置が、黒人たちには彼らに対する差別や偏見の表れと感じられたからである。黒人たちは日系人の立ち退きに対して同情的であり、再定住に対しても反対しなかったのに、日系人たちが黒人たちに対する理解がないことに憤りを覚えた。また、黒人たちも生活が苦しいのに、帰還した日系人にはばかり政府や宗教グループなどから援助が与えられることに対していくらかの苛立ちを感じていた。今までくすぶっていた日系人に対するこうした不満が、強盗事件を機に高まったのである。<sup>23</sup> 彼らは日系人たちの態度に黒人蔑視を感じとって



た。ある黒人は『トリビューン』に次のように投書している。

我々との取引など必要ないかのように冷たく扱う日系商店もあれば、明らかに二度と来るなどと言わんばかりに軽蔑的に扱うところもある。<sup>24</sup>

黒人と日系人との緊張関係を緩和するために、「ピルグリム・ハウス」のキングスレー、JACL ロサンゼルス支部代表のエイジ・タナベ、ケンジ・イトウ弁護士、ロサンゼルス市長フレッチャー・ポーロン、警察副署長ジョセフ・リードら約60名が集まって、地域犯罪への対策のため黒人と日系人の協調関係を保つ方法が話し合われた。キングスレーは、黒人だけが日系人の立ち退きに反対し、帰還した人びとを迎え入れたことを強調し、黒人は日系人の味方であり、同じ地域に住む仲間であると主張した。そして、「両人種の接触が増える中で、犯罪に関わったほんの数人を黒人の『シンボル』として見ることは好ましくなく、夜警を雇ったことは、日系人だけを地域の犯罪から保護し、日系人だけの活動にとどまっていると述べた。日系人たちが頻発する強盗事件を地域の問題ではなく、人種の問題として考えていることが問題であると示唆したのである。キングスレーはさらに、地域の犯罪は黒人と日系人が一緒に解決すべき問題であり、共通の基盤を持つべきであるとした。話し合いの結果、日系人と黒人の両人種からなる組織を結成する決議が採択され、二世の夜警によるパトロールは撤回された。「ピルグリム・ハウス」などの組織が積極的に問題解決のために動いたので、黒人と日系人の間に高まっていた緊張が直接対立に発展することはなかった。<sup>25</sup>

## (2) 「ピルグリム・ハウス」の立ち退き問題

こうした「ピルグリム・ハウス」の活躍にも関わらず、日系人たちの間には同組織が使っている日系ユニオン教会の建物を日系人たちに返すべきだという声があがっていた。建物返還を求めた日系人たちの主張によれば、教会を建てる際にその費用の三分の一を日系人たちが払い、三分の一を会衆派教会の評議会が、残りの三分の一を長老派教会の評議会が払い、教会は日系人のために建てられたものであった。立ち退きの際に会衆派教会と教会評議会に日系人たちが戻ってきたら教会を自分たちに返してもらうという約束をしていた。しかし、日系人たちが戻ってみると「ピルグリム・ハウス」がその建物を使っていたのである。教会評議会の一員であった井下福馬は、「ピルグリム・ハウス」は「良い仕事を

しており、ブロンズヴィルから立ち退くべきではないと思うが、その仕事のために他の場所を探すべきである」と述べている。<sup>26</sup>

日系人たちは「ピルグリム・ハウス」の活動を評価していたが、人種統合された教会として受け入れてはいなかった。同組織の活動の一部としてできた「すべての人びとのための教会」は、多数派の白人の中に日系人を吸収するという形ではなく、日系人、白人、黒人、メキシコ系、中国系など同じ地域に住む人びとのための教会を目指していたが、日系人たちは自分たちに合ったプログラムが行われていないと考えていた。彼らもアメリカ社会への「統合」が必要なことはわかっていたが、この時点で推進されようとしている統合された教会は十分に日系人たちの間で話し合われたものではなく、彼らの実情に合っていなかったため、すぐに必要なものとは考えていなかった。また、自分たちの建物やプログラムを持つ権利があると考えていた人たちは、他の人種を「仲間」とするプログラムにはあまり関心がなかった。日系人の中には外部の者に対する不信、及び黒人やメキシコ系などを下に見る偏見が存在していたのである。<sup>27</sup>

日系ユニオン教会の建物内には二つの教会が存在する状態になっていた。日系人たちは異なる人種の人たちとの社交生活ではなく、自分たちの社交生活を望んでいた。彼らは、WRAや「善意」の人びとが強調する「統合」そのものに辟易しており、自分たちの仲間だけでくつろぎたいと考えていた。収容所を出るときから、仲間同士で固まらず、拡散し、アメリカ社会に「統合」するように言われつづけてきた日系人にとって、多様な人種からなる「ピルグリム・ハウス」のプログラムは「統合」を「強要」するものを感じられた。<sup>28</sup>

しかしながら、日系ユニオン教会側は、日系人たちが抱いていた不満を知りながらも、それらをあからさまに示したり、建物返還要求の際に対決的な姿勢をとったりはせず、平和的に解決を図ろうとした。彼らは立ち退き問題を建物争奪戦のように黒人側に受け取られないように、黒人たちを追い出したいわけではないことを強調した。日系ユニオン教会の幸田宗平牧師は、「ピルグリム・ハウス」と日系ユニオン教会は両方とも長老派と会衆派の配慮の下にある組織であり、いわば「姉妹組織」であるので、建物争奪という捉え方は間違っていると述べた。幸田によれば、日系ユニオン教会は1923年から建物を使用しており、戦後に日系人たちがロサンゼルスに帰還してからも3年間建物の返還を「我慢強く、平和的に」待ち続け、この間に決して「ピルグリム・ハウス」を「追い出す」ようなことをしたり、「最後通告」を送ったりしたことはないと訴え

た。そして、建物を最終的にどうするかを決めるのは日系ユニオン教会ではなく、両組織に関係がある長老派と会衆派であるとして、日系人たちが無理やり追い出そうとしているわけではないことを強調した。<sup>29</sup> 日系ユニオン教会は、日系人側の不満を抑えながら、黒人側の機嫌を損ねることなく、建物を取り返そうとしたのである。

このことは、日系人側も「ピルグリム・ハウス」のおかげで黒人と日系人との間の共存が保たれていたと認めていたことを示している。幸田牧師は「ピルグリム・ハウス」の建物返還後も地域のために働き続けることを心から望んでおり、組織の移転後も黒人はリトル・トーキョーの「れっきとした住民」であるので、日系人と黒人がお互いに敬意と尊重を示すよう願っていると述べた。日系教会側も自分たちの建物を地域のために働いている組織から取り返したいという意図を前面に出して、黒人をはじめとする地域の住民たちの反感を買うようなことは控え、対立を回避しようとしたのである。<sup>30</sup> 日系人たちは他の住民との表面的な共存を図り、「ピルグリム・ハウス」に敵対していないことを示しつつ、自分たちだけの場を何とか確保しようとした。同時にこのことは、日系人たちが同組織を日系人を含めた地域の組織ではなく、黒人のための組織と見なしたことを示している。

建物の所有権を持つ長老派と会衆派は日系人の要求に応え、建物を日系ユニオン教会に返すことを決めた。「ピルグリム・ハウス」側もこうした要求を受け、1948年9月に日系ユニオン教会から数ブロック離れた「フィリピン・センター」に移った。しかし、約半年後には市庁舎拡大に伴い、「ピルグリム・ハウス」のある一角が取り壊されることとなった。そして、リトル・トーキョーの日系人や黒人を含む多くの住民たちが郊外に移動し、多人種のためのコミュニティ・センターの役割を終えたと判断し、1950年10月に同組織はその活動を停止した。<sup>31</sup>

「ピルグリム・ハウス」は様々な人種が交じり合うリトル・トーキョー周辺の住人たちに「共通の場」を提供し続け、人種間の協調を探り続けた。同組織の働きかけによって住民同士の対立は回避されたが、摩擦の解消イコール緊密な関係の構築ということではなかった。日系人側も人種対立の回避という点では非常に気を使ったが、人種間の協調よりむしろ「他者」に対して距離を置くことで衝突を避けようとした。彼らは、地域の住民たちの敵意をかうことなく、穏便に自分たちの場所を確保しようとした。建物返還を巡る問題は、すべての住民のためのコミュニティ作りを目指した「ピルグリム・ハウス」と、日系人のための精神的拠り所としてのリトル・トーキョーを求めた帰還者たちとの間の意識のずれ

を浮き彫りにした。包括的なコミュニティを作ろうとした「ピルグリム・ハウス」と自分たちの教会や居場所を持ちたいという日系人とのせめぎあいが見られたのである。

## ・日系人の自己認識、他者認識

「ピルグリム・ハウス」の活動がリトル・トーキョーの日系人たちの間で完全には受け入れられなかったことは、日系人と黒人との関係を象徴していたと言える。

日系人たちにとって、黒人居住区となり一時名前まで変わってしまったリトル・トーキョーは自分たちの街という意識があった。特に一世たちは、リトル・トーキョーの変わりようを目の当たりにし、早くかつての姿を取り戻したいという思いを持った。

夫れぞれ昔の職に戻って再び戦前の立派な小東京は出来ないにしても幾分かその片影のある日本人街が出切る日も遠くはないだらう早く現在の黒人の巣と化した不潔極まる東一街を昔の小東京に取り戻したいものだ[マ] <sup>32</sup>

彼らにとって復興とは、昔の姿の日系人街を取り戻すことであり、そこには戦時中に流入してきた黒人の姿は含まれていなかった。黒人居住区となってしまったリトル・トーキョーは相変わらず自分たちの街であり、黒人たちと同じコミュニティの住民として受け入れて新しい形の共同体を築こうという考えよりも、日系人街を取り戻そうという考えが強かったのである。彼らにとって、黒人たちは自分たちが立ち退かされている間にやってきた「他者」であった。立ち退きや収容といった体験をした日系人たちの他の人種・民族に対する不信は大きいものであった。

日系人たちのこのような態度は、日系人街に住んでいた黒人によっても指摘されている。

彼らは黒人たちを追い出そうとしているようである。黒人は日系人の良き友なのに。…日系人たちが買占めようとしているときに、彼らに対抗することはできない。黒人にとってたった百ドルの価値しかない所に彼らは五百ドル払うと言うだろう。 <sup>33</sup>

日系人たちは黒人たちに対して根強い偏見を持っていた。黒人新聞『ロサンゼルス・トリビューン』でコラムを書いていた日系二世のヒサエ・ヤマモトは、日系人たちが他の人種に対する差別に反対しないどころか、それに加担さえしていたことを指摘している。彼女は、ある日系人がレストランのアルバイトをはじめたところ、その白人と黒人の従業員、白人と日系人の従業員は良好な関係にあるのに、黒人と日系人の間にはまったく交流がないことに気付いたという話をコラムで紹介している。彼が黒人の従業員と一緒に食事を取ると、他の日系人従業員たちがやってきて、彼の行為は「日系人の地位を貶め」、「発展しつつある日系人と白人との友情を阻害する」と非難した。他の日系人たちが黒人に差別的な態度を取っている姿を見て失望している彼に、「君のことは好きだよ。なぜなら、君は全く日系人らしくないからね」という黒人の同僚がかけた言葉でコラムは締めくくられている。このコラムは、日系人たちが相変わらず黒人を人種階層制の中で下位に位置付けており、黒人と親しくすることに対して白人の視線を意識していることを示している。また、自分たちを非白人マイノリティの側ではなく、白人の側に位置付けようとする日系人の姿勢が描かれている。黒人との交流が日系人の社会的、法的地位の改善にプラスに働くのではなく、マイナスになると多くの日系人たちは考えていた。しかし、そうした日系人の態度に失望している一人の日系人の姿は、アメリカ社会の偏見を反映した人種階層制に対する疑問や異なる視点が芽生えていることも示している。<sup>34</sup>

ヤマモト自身も人種間の協調のために働く「ピルグリム・ハウス」の活動を評価しながらも、その人種関係に関する報告にはあまり共鳴していなかった。「人種間の関係は良好で、コミュニティに流入する日系人の数が目立ってきてても、彼らに対する敵意はない」という「ピルグリム・ハウス」の報告に対し、日系人の帰還によって黒人は住居や仕事の面で影響を受けており、中には憤りを覚えている者もいると彼女は指摘している。さらには、次のように述べている。

しかしながら、日系の建物所有者や元リトル・トーキョーの住民たちが「黒人を追い出す」意図を持って、次第に戻ってきていることを私は恥ずかしながら認識している。例えば、東一番街のある建物の所有者が、少なくとも帰還者たちの間で、日系人が元の場所に帰る準備ができれば、黒人の店子を追い出すと公言していることを私は知っている。…黒人やメキシコ系やユダヤ系の隣人に好意を持ってここに再定住している日系人は、一世も二世も含めて、少数である。<sup>35</sup>

ヤマモトは黒人と日系人との建物の所有をめぐる争いを例に挙げて、日系人たちは他の人種との小競り合いを恐れており、そうした態度を取ってあからさまにする勇気がないのだとしている。ヤマモトは「ピルグリム・ハウス」の報告を額面通りには受け取っておらず、日系人と黒人との「良好」な関係は表面的なものと考えていた。直接対立の回避は、黒人たちに対する闘争心や偏見などの解消を意味しなかった。

しかし、同時に、ヤマモトは彼女の弟が地域の野球チームや様々な人種からなるコーラスに参加している例を挙げ、日系人の中にも異人種間の活動への参加が少しずつではあるが進んでいることを示している。<sup>36</sup> 日系人の間に白人を頂点とした人種階層制の名残と新しい意識の兆しがあつたことがうかがえる。

日系人たちの中に少しずつではあるが人種間の協調や相互理解に対する意識が芽生えてきていたが、日系人と黒人との間には人種関係に対する態度や意識において隔たりがあつた。『トリビューン』の黒人編集者アルミナ・デイビスは、黒人と日系人の関係を重要だと考え、度々紙面で取り上げた。しかし、デイビスによれば、日系人たちは黒人を蔑視しており、共通の目的のために両者が一緒に行動することがほとんどなく、その関係は「最悪 (stink)」であるとしている。

一年前よりも二つのマイノリティ間の溝は深まっており、一飛びで飛び越せるほどの狭い溝ではない。日系人が黒人を温かく迎え入れないという事実は、日系人のせいである。…当初から立ち退き者たちを雇う努力や、多くの努力は、[日系人によって]きっぱりと反対された。偏見に抗議したり反対したりする黒人組織への日系人の統合の試みもあつた。数少ない例外を除いて、これらの努力は[日系人の]無関心にぶつかった。…黒人の苛立った激しい反応に日系人たちは驚く。というのは、日系人たちは[平等を求めて闘うことに]慣れていないし、多くを望みもしないし、その結果として苛立ちもしないからである。一方、黒人は長くここにおいて、望み続けるだけでなく、要求し続け、壁に頭をぶつけ続けてきた。<sup>37</sup>

デイビスの記事は、彼女に代表される黒人指導者側の差別問題や人種関係に対する意識と日系人側の意識の落差を表している。彼女から見ると、両人種間に協調関係ができないのは日系人のせいであつた。黒人だけが日系人の立ち退きに反対の声をあげ、帰還した日系人を友好的に迎え入れたのに、日系人は黒人に対し何の共感も持たず、無関心であるように

見えたのである。黒人指導者たちは日系人を同じマイノリティ、同じコミュニティの住人として協力して差別や地域の問題に取り組むべきだと考えているのに対し、日系人たちはそうした意識が低く、そもそも彼らにとって黒人は同じ地域の住人ではあっても、同じコミュニティの住人ととらえていなかったため、一緒にコミュニティを築いていこうという気持ちを持っていなかった。日系人は黒人を「他者」と見なし、彼らを理解しようという努力をあまりしなかった。『羅府新報』のコラムニスト、メアリー・オーヤマも、日系人たちは白人たちと良好な関係を持つことについては「熱狂的」であったが、「日常的に接触のある黒人やメキシコ系といった人たちとの関係改善は無視してきた」と指摘している。<sup>38</sup>

一方、一般の黒人居住者の多くは、いつかは別の場所に移るつもりであり、リトル・トーキョーを一時的な場所と捉えていた。黒人たちの「ここは日系人の故郷で、彼らは取り戻す権利がある」という言葉も、リトル・トーキョーを永住の地とは考えていなかったことを示している。両者の間に深刻なトラブルがなかったのもこのことが一因と言えよう。一般の黒人居住者にとって、日系人たちは「当座のコミュニティ」の住人であって、長く付き合っていく相手とは考えていなかった。<sup>39</sup> 黒人指導者や一部の日系人指導者たちは、日系人たちや南部出身の黒人移住者たちの間に連帯の重要性が広まらないことに苛立ちと歯痒さを感じていた。たとえ一部の日系人たちの間で人種協調の意識が芽生えつつあったにしても、それは黒人指導者たちの期待に十分応えるものではなかった。

## おわりに

西海岸への帰還は、かつて日系人が住んでいた地域に物理的に戻るといふ以上の大きな意味を有していた。すなわち、異なる人種と接触が増え、その接触を通して、それまで経験したより遥かに緊密なレベルにおいてアメリカという多人種・多民族社会へ参入することを意味したのである。日系人たちは、再定住の経験を通して、戦前のような他の人種を排除して日系人だけで生活していくことはできないことを認識した。黒人、日系人の双方から共存のための模索がなされ、そのおかげで両者間の衝突を回避することはできた。リトル・トーキョー内での共存という点において、「ピルグリム・ハウス」と帰還した日系人たちは共通の意識を持っていた。

しかし、接触を通して、日系人と黒人との差別に対する意識の差や地

域の住民としての意識の隔たりが明らかになった。人種的対立が起こらなかつたとは言え、日系人と黒人の間には同じ地域に住む者同士の共感や親近感といった感情や同じ非白人としての連帯感は共有されなかつた。日系ユニオン教会の幸田牧師が言うように、「西海岸に戻ってきたのは最も保守的な人びと」であり、日系コミュニティ以外に住んだことがないので、「統合への準備ができていな」かつた。<sup>40</sup>特に一世たちは、日系コミュニティの外側に関心を向ける余裕がなかつた。立ち退きや収容による精神的な打撃を和らげるため「仲間」同士の交流の場や帰属意識を確認する場を求めていた。周囲に波風を立てず、生活を立て直したい日系人と、多人種共存のコミュニティを作り、差別や人種問題に積極的に取り組もうとしていた「ビルグリム・ハウス」、そしてリトル・トーキョーを一時的コミュニティと考えていた黒人居住者では、地域に対する考えがみ合っていなかつたといえよう。

日系ユニオン教会の建物返還をめぐるいざこざやマモトや『トリビューン』編集部の指摘などから明らかなように、帰還した日系人たちの間には他の人種と交流し、アメリカ社会に入っていくべきだと思ひよりも、社会的・文化的活動を通して「日系アメリカ人」としての意識を共有できる自分たちの場所を確保したいと思ひの方が大きかつた。彼らがその場所の確保や法的、社会的地位の改善を考えると、日系人たちは白人との良好な関係を持つことが役に立つと考えていたが、黒人との交流が彼らにとって有利に働くという考えはあまりなかつた。むしろ、日系人たちは黒人の側に立つことを否定的に捉えており、生活の再建に追われていた彼らはこれ以上不利な状況に置かれたくないと考えていた。確かに他のマイノリティとの交流を通して、白人を頂点とした人種階層制に疑問を持つ者も出てきていた。他のマイノリティとの差別化を図ることで、有色人種であっても日系人は白人に近い存在であると強調することが差別解消にはつながらないという認識の萌芽が見られたが、非白人マイノリティの一員としての意識を多くの日系人たちが共有し、連帯を模索していくほどにはまだ十分なものではなかつた。



## Notes

- 1 「再定住」(resettlement)とは最初は第二次世界大戦中に収容所から中西部や東部へ日系人が移住することを意味したが、戦後の再定住、西海岸への帰還(return)も含むようになった。「再定住期」は収容所からの出所が始まった1942年から法律によって日本からの移民が形式的とは言え認められた1952年までを一応の区切りとするが、西海岸への帰還を中心にしているので、本論文では1945年からを扱っている。
- 2 Katherine Luomala, "California Takes Back Its Japanese Evacuees," *Applied Anthropology* 5:3(1946),25-39; 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』(リーベル出版、1995年)油井大三郎『日系アメリカ人の再定住とカリフォルニア社会』(五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』東京大学出版会、2000年)、193-213頁などが挙げられる。
- 3 U.S. Department of the Interior, *People in Motion* (Washington D.C.: GOP, 1947); Kariann A. Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back," MA Thesis, University of California, Los Angeles, 1996.
- 4 *Boyle Heights Oral History Project: Interview Summaries and Essays* (Los Angeles: Japanese American National Museum, 2002); George J. Sanchez, "'What's Good for Boyle Heights Is Good for the Jews': the Creating Multiracialism on the Eastside during the 1950s," *American Quarterly* 56:3(2004), 633-62. 36番街は戦後になって黒人コミュニティに飲み込まれ、日系人たちはクレンショーに移っていった。
- 5 "Highlights of Conference on Interracial Cooperation," Japanese American Research Project, Box 41, Special Collection, Young Research Library, UCLA; Toru Matsumoto, *Beyond Prejudice* (New York: Friendship Press, 1946), 136-38.
- 6 1941年に創刊された『ロサンゼルス・トリビューン』は、コミュニティに根ざした黒人週刊新聞であり、オフィスはリトル・トーキョーに隣接するサウス・セントラルにあった。帰還した日系人と黒人との交流を促進させようという意図と、日系人購買者を増やしたいという経済的理由とから、ヒサエ・ヤマモトを雇った。『トリビューン』については、村山瑞穂「ある異人種間文化統合の試み—ヒサエ・ヤマモトと『ロサンゼルス・トリビューン』」『愛知県立大学外国語学部紀要』35号(2003年3月)、127-42頁を参照。
- 7 Ichiro Mike Murase, *Little Tokyo: One Hundred Years in Pictures* (Los Angeles: Visual Communications/ Asian American Studies Central, Inc., 1983), 7, 9, 11; William M. Mason and John A. Mckinstry, *The Japanese of Los Angeles* (Los Angeles: Los Angeles County Museum of Natural History, 1969), 7.
- 8 Paul R. Spickard, *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group* (New York: Twayne Publishers, 1996), 81-83.
- 9 John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900-1942* (Urbana: University of Illinois Press, 1977), 10, 71.
- 10 Murase, *Little Tokyo*, 16; Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back," 51.
- 11 From Arthur F. Milley to Supervisor John Anson Ford, "Re: Meeting of Leadership Round Table, July 7, 1943," 8 July 1943, John A. Ford Collections, Box 76, Huntington Library, San Marino, California.
- 12 War Relocation Authority, "Returns to West Coast."

## Race Relations in Little Tokyo during the Postwar Period

- 13 "Reconversion," *Spotlight*, n.d. John A. Ford Collections, Box 76.
- 14 Lon Kurashige, *Japanese American Celebration and Conflict* (Berkeley: University of California Press, 2002), 112; U.S. Department of the Interior, *People in Motion*, 98.
- 15 Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back," 98-99.
- 16 "Report on Pilgrim House," John A. Ford Collections, Box 76.
- 17 Samuel Ishikawa, "Common Ground," 10 September 1945, John A. Ford Collections, Box 74.
- 18 Tom Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 24 July 1946, Japanese American Evacuation and Resettlement Studies (hereafter JERS), Bancroft Library, University of California, Berkeley, reel 107; 17 September 1946, JERS, reel 108.
- 19 "The Race War That Flopped," *Ebony*, 1:8 (July 1946), 3.
- 20 Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 15 September, 3 November 1946, JERS, reel 108; *Los Angeles Tribune*, 27 April 1946.
- 21 『羅府新報』<sub>a</sub> 1947年1月30日；1947年2月1日；*Rafu Shimpō*, 3 February 1947.
- 22 *Rafu Shimpō*, 1 February 1947；『羅府新報』<sub>a</sub>1947年2月5日；1947年2月7日。
- 23 U.S. Department of the Interior, *People in Motion*, 224-25.
- 24 *Los Angeles Tribune*, 1 March 1947.
- 25 "Los Angeles Minority Groups Join Hands To Make Brotherhood Reality," John A. Ford Collection, Box 76; *Pacific Citizen*, 8 March 1947; *Los Angeles Tribune*, 8 March 1947.
- 26 Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 23 August 1946, JERS, reel 107.
- 27 Tom Sasaki, Research Notes, 30 December 1946, Part III, 7, Part IV, 5, 7, JERS, reel 65.
- 28 *Pacific Citizen*, 4 January 1947.
- 29 *Los Angeles Tribune*, 9 October 1948.
- 30 *Ibid.*
- 31 *Ibid.*, 27 December 1947; Pilgrim House, "Board of Manager Meeting," 26 November 1947; Letter from Mrs. T.G. Wight, 7 October 1950; John A. Ford Collections, Box 76.
- 32 『コロラド時事』<sub>a</sub>(*Colorado Times*) 1945年7月31日。
- 33 Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 16 September 1946, JERS, reel 108.
- 34 *Los Angeles Tribune*, 30 August 1947.
- 35 *Ibid.*, 1 October 1945.
- 36 *Ibid.*
- 37 *Ibid.*, 14 September 1946.
- 38 *Rafu Shimpō*, 23 March 1947.
- 39 Yokota, "From Little Tokyo to Bronzeville and Back," 72; Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 18 September 1946, JERS, reel 108.
- 40 Sasaki, "Sasaki's Daily Reports from Los Angeles," 9 August 1946, JERS, reel 107.